

# 中国法華教学における歴位成仏

丸 山 孝 雄

## 一 問題の所在

法華経はみずから「教菩薩法」と称し、声聞たる舍利弗等の授記作仏においても「菩薩の道を具足して当に仏と作ることを得べし。」と記している。しかし法華経には、般若経類や華嚴経等の如き菩薩の階位の体系的記述はみられず、ただ「新発意菩薩 (nava-yāna-samprasthita bodhisattva)」「不退菩薩、阿鞞跋致 (avivartika bodhisattva)」とか「八生 (aṣṭa-jātī- [prati] baddha)」乃至「一生 (eka-jātī-paribaddha)」に当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。」等の語句が散見せられるのみである。

成仏を論ずる場合、発心した菩薩が如何なる過程を経て仏と成るかが問題となる。法華経が漢訳されるや、中国の註釈諸家は時代と共に伝訳される諸経論の菩薩の階位に照らして、法華経の文の中に菩薩の階位を探り歴位成仏を読み取るうと心を砕いた。一例を挙げれば、隋から唐初にかけて三論

の教学を大成し生涯法華経を講讀した嘉祥大師吉藏(五四九—六一三)は、その最初期の撰述といわれる『法華玄論』において、信解品等に拠って菩薩の五十二位登昇成仏説を述べ、分別功德品の前掲「八生当得」乃至「一生当得」の釈では五十位登昇後第十地滿分成仏説を述べている。これについては拙稿「法華玄論における菩薩の歴位成仏」において論じたので本稿では吉藏に至るまでの中国法華教学における歴位成仏説の展開過程を考察したい。ここにおいて中国法華教学とは、主として竺道生(三五五?—四三四)撰『妙法蓮花経疏』(『道生の疏』と略記する)、光宅寺法雲(四六七—五二九)撰『法華義記』、天台智者大師智顛(五三八—五九七)述『妙法蓮華経文句』(『法華文句』と略記する)および嘉祥大師吉藏撰『法華玄論』に説かれる法華経に関する学説を指す。これら諸撰述の中で菩薩の階位あるいは歴位成仏をほぼ共通に論じているのは次の五点である。

① 方便品「是法不可示」以下の釈。

② 方便品「開示悟入」の釈。

③ 信解品の釈。但し道生と法雲においては「多有僮僕」

以下の釈、智顛（灌頂）と吉蔵においては一往化・隨  
逐化・畢竟化の「三化」の説。

④ 菓草喩品「三草二木」の釈。

⑤ 分別功德品「八生」乃至「一生当得」の釈。

それ故、右の五点について学説の展開過程を考察しよう。

## 二 道生の疏

① 方便品の「是法不可示 言辞相寂滅 諸余衆生類 無有  
能得解」（第六偈）に続く「除諸菩薩衆 信力堅固者」（第七  
偈）以下の釈において次のように述べている。

「堅固者」とは八住以上にして、唯、其れのみ能く仏の当に一乘  
を説くべきを測る。故に「除」と云うなり。二乗は居然として測  
らず。「新発意菩薩」とは性解の徒なり。「不退菩薩」とは初住よ  
り七住に至るものにて、豈知らずと曰わんや。一乗を高美し、人  
をして崇信せしめんと欲するが故に、爾云うのみ。

これは「十住説」によって解釈したもののみられ、下位から  
上位への順に整理すると次の如くである。

〔引用経文〕

〔道生の疏〕

第14偈 新発意菩薩

性解之徒

第17偈 不退〔諸〕菩薩

初住至七住

第7偈〔諸菩薩衆信力〕堅固者 八住以上

② 方便品の「開示悟入」の釈では「一義に云く」として、  
次のように述べている。

開―初住より七住に至るものは、漸に煩惱を除くを、開と曰う、  
と。

示―八住のものは、觀仏三昧を得て、常に仏慧を示さんことを樂  
う、と。

悟―九住の菩薩は、善慧の為に深く仏之知見を悟るなり、と。  
入―十住の菩薩は、金剛三昧を以て塵習を散壞して転た仏慧に入  
る、と。

右にみる如く道生の用いた「十住説」の第「十住」は、仏位  
に直結するものと解することができる。ここに登昇成仏がみ  
られるのである。

③ 信解品の「多有僮僕臣佐吏民」の釈では「臣佐」を菩薩  
とし「僮」等を次のように記している。

僮―外道。僕―衆魔。臣佐―菩薩。吏―声聞。民―衆  
生。王―仏。象馬牛羊―三乘、五通の諸の功德。

ここには菩薩の階位はみられないが、後述の法雲の『法華義  
記』では「臣・佐・大臣・刹利・居士」に菩薩の階位をあて  
ており、解釈の展開がみられるのである。

④ 菓草喩品の所謂「三草二木」の相当箇所には「菓木」の  
語はあるが「三草」の語も釈もみられず、「樹」について次

のように述べている。<sup>(15)</sup>

「是名小樹」とは、菩薩道の勝れたるを明かさんと欲して、更に譬うるに樹を以てす。樹は蔭覆を以て義と為す。大乘は兼ね被うこと猶お此の若きなり。七住以下は、之を小樹と謂い、八住以上は之を大樹と謂うなり。

ここに七住以下の菩薩と八住以上の菩薩との区別がみられ、この分類は前掲の①と②にも共通してみられるところである。しかしこの葉草喩品の釈においては登昇成仏は明示されていない。

⑤ 分別功德品の「八生」乃至「一生」の釈では次のように述べている。<sup>(16)</sup>

「八生当得無上菩提」とは、此れは八住に就いて語を為すなり。八住以上は既に無復身なれば、何を以てか其の智の明・昧を知ることを得ん。故に、之に寄するに八生を以てす。仏より去ること久遠なるを知るなり。

「一生」とは弥勒の如し。当「卍当字原本不明」の下、之を一生と謂う。是の如く或いは二、或いは三乃至八あり。八とは多生なり。多生なるが故に仏より去ること遠きを知る。知も亦昧し。

この釈においても八住以上をそれ以下と区別する見解が示されている。「一生」については「弥勒の如し」と述べているから、この語を「一生補処」の意に解していることが知られる。現存梵本の相当箇所には *eka-jāti-pratibaddha* とあり、

中国法華教学における歴位成仏(丸山)

この語は「一生補処」「一生所繫」の漢訳語をもつから、道生の「一生」に関する見解は妥当である。次の生には仏と成るのであり、ここに登昇成仏説がみられるのである。

### 三 法華義記

① 方便品の「是法不可示」以下の釈では、經の「新發意菩薩」と「不退諸菩薩」を次のように位置づけている。<sup>(17)</sup> 但し「堅固者」については菩薩の階位に関する記述はみられない。

新發意菩薩——凡夫菩薩

不退諸菩薩——初地以上至六地菩薩

② 方便品の「開示悟入」の釈には菩薩の階位はみられない。

③ 信解品の「多有僮僕」以下の釈では次のように述べている。<sup>(18)</sup>

内外の凡夫、受学の弟子は僮僕の如し。八地以上の菩薩は臣の如し。七地以下初地以上の菩薩は佐の如し。緣覺は吏の如し。声聞は民の如し。大乘は象の如し。自余の三乘等は馬牛羊の如し。

また「親族・国王・大臣」等の釈では次のように述べている。<sup>(19)</sup>

分身の諸仏を親族と為す。多宝仏塔は国王の如し。十地の菩薩は大臣の如し。九地の菩薩は刹利の如し。八地已還の菩薩は居士の

如し。

「僮僕」等と「親族」等とは、經の叙述自体に列挙基準の相違があるが、あえて『法華義記』の兩釈にみられる菩薩の階位を合わせて下位より列挙すれば次のようになる。

|    |            |    |      |
|----|------------|----|------|
| 僮僕 | 内外凡夫受学弟子   | 刹利 | 九地菩薩 |
| 佐  | 七地以下初地以上菩薩 | 大臣 | 十地菩薩 |
| 居士 | 八地已還菩薩     | 親族 | 分身諸仏 |
| 臣  | 八地以上菩薩     | 國王 | 多宝仏塔 |

右の釈には『道生の疏』よりも進展がみられるが、「僮僕」等にただ菩薩の階位等をあてはめたのみで、ここには登昇成仏説はみられない。

④ 葉草喩品の「三草二木」の釈では、長行と偈頌の兩釈において、次のように配釈している。

| 草木  | 長行の釈      | 偈頌の釈                |
|-----|-----------|---------------------|
| 小葉草 | 人乘・天乘     | 人・天の二乘              |
| 中葉草 | 声聞・緣覚     | 声聞・緣覚の二乘            |
| 上葉草 | 三乗中の菩薩    | 外凡夫偏行六度菩薩           |
| 小樹  | 大乘中の内凡夫菩薩 | 内凡菩薩（信首以上の菩薩）       |
| 大樹  | 初地以上の菩薩   | 常住以上の聖位の菩薩（初地以上の菩薩） |

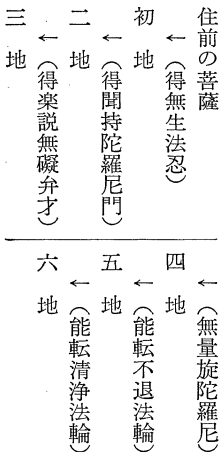
法雲の釈は道生とは異なるが、人・天に乗を付して人乘・天乘とし、これに三乗を加えた五乘説を導入して、それぞれの

段階に所属する人々を「三草二木」に配釈した。この中で三乗中の菩薩と大乘中の菩薩とを区別している点が目目される。法雲が後世、四車家の唱道者といわれる所以もここに存するとみられる。

經中に草木の「受潤」と「増長」が説かれている。草はいかに成長しても樹木にはならないという議論もある。しかし「三草二木」はあくまでも譬喩であつて、教理のすべてを表現しうるものではない。葉草喩品には菩薩の階位は明示されていないが、第四十四偈に

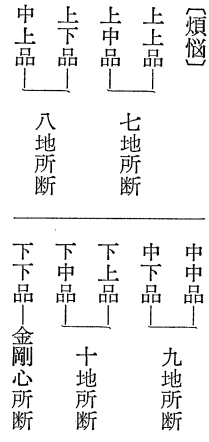
諸声聞衆 皆非滅度 汝等所行 是菩薩道 漸漸修学 悉当成仏と記されていることから、ここに登昇成仏の思想が看取されるのである。

⑤ 分別功德品の釈では、法華經に如來の寿命の長遠なることを説けるを聞いて、住前の菩薩が歴位登昇して遂に成仏する過程を詳細に論じている。その要点を整理すれば次の通りである。まず「第一に増道を挙げて因地の記を授く。」(中略)



「凡そ六種の記あり。即ち六地の記を授くるなり。」といい、登地から六地に至るまでを述べている。

次に「復小千国土」以下の釈において「第二に損生に寄せて果地の記を授く。」と述べ、「但だ人の此の損生を解すること同じからず。今且く一家の所習に就かん。」と断つて後、「七地より以上金剛心に至るまで、煩惱を断ずるに凡そ九品を作す。」といい、次のように分類している。



そして「此の九品の煩惱は皆、生を得るが故に九生と言ふなり。」と述べ、次に「八生当得菩提」乃至「一生当得菩提」を十地説に基づいて次のように説明している。

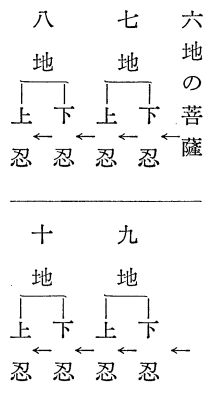
若し十地に依らば、忍を解する者、地地の中に各、三忍あり。今此の経文を消さんと欲す。故に七地以上に各、三忍あり。六地の菩薩は寿量の説を聞いて七地の下忍に登ることを得、即ち一品の煩惱を断す。余す所の八品は八生の為に因と作るが故に「八生当得菩提」と言う。

七地の下忍の菩薩は寿量を説くを聞いて七地上忍に登る。時に即ち一品の煩惱を断じ、即ち二品の生を損らす。即ち「七生当得

菩提」なり。(中略)

十地の下忍の菩薩は寿量を説くを聞いて進んで十地上忍に登る。時に即ち一品の煩惱を断ずれば已に八品の生を損らす。

この中で、各々の地に三忍ありと言いながら「中忍」は記されていない。右の登昇の次第を图示すれば次の通りである。



九品の煩惱から八品の煩惱を差し引くと一品の煩惱が残ることになる。そこで「一生当得菩提」について次のように述べている。

余に金剛心所断の一品の煩惱あり。即ち「一生当得菩提」なり。但だ文句略なるが故に八生より仍ち超えて四生に至るなり。

このように法雲は「今且就一家所習」と断りながらも、菩薩が十地の階位を登昇して後、金剛心によって余りの一品の煩惱を断じて成仏する過程を詳述している。そしてこの説は『法華文句』『法華玄論』等に影響を及ぼしているのである。なお「復有八世界」以下の釈において「第三に外凡夫等に記を授け、退堕の人を撰するなり。」と述べている。

#### 四 法華文句と法華玄論

① 方便品「是法不可示」以下の釈。『法華文句』では「信力堅固者」を円教の十信としているのみである。因みに、吉藏の『法華玄論』にはこの釈は見当たらず、『法華義疏』の当該箇所にも菩薩の階位はみられない。

② 方便品「開示悟入」の釈。『法華文句』と『法華玄論』を比較するに、両者に共通の素材がみられるが、「十信」の取捨により結論を異にしている。ここに『法華玄論』の叙述順序に従って要点を比較すれば次の通りである。

#### 法華文句

A 今且從略說以三四一

消文。一約三四位。

開十住小白花位

示十行大白花

悟十廻向小赤位

入十地大赤位

然円道妙位一位之中。即具四十一地功德。

B 有人言

開三十心

示初地至六地

悟七地至九地

入十地

#### 法華玄論

A' 有人言

開十住、如兩小白花

示十行、如大白花

悟十廻向、如小赤花

入十地、如大赤花

故下明乘是宝車遊於四方。即是遊心四位中

B' 有人言

開三十心

示初地至六地

悟九地

入十地

C 有人引華嚴纓絡仁王攝大

乘十七地論五凡夫等。皆有五

十二位。地前有四十心。何

不用之。

此人謬引華嚴。華嚴不明

十信。縱使諸部明地前四十

心位者。皆非斷道。何因

用之解開仏智見。皆漫語耳。

C' 評曰尋華嚴纓絡仁王攝大

乘論十七地論五凡夫論等。皆

有五十二位。則地前有四十

心。初即是十信。十信僧祇行

行始乃得之。此二釈何故不

明十信。但取三十心十地

耶。(中略) 信解即十信。何

故不取耶。

右の中でBとB'は引用文がほぼ同一である。ところで『法華玄論』のC'では、A'とB'の「有人言」について「此の二釈は何故に十信を明かさずして但だ三十心・十地のみを取るや。」と批判し、自らは五十二位説を採用している。しかるに『法華文句』では右のC'の説を「有人」の説として掲げて後、「此の人は謬りて華嚴を引く。華嚴には十信を明かさず。」とその誤謬を指摘し「皆漫語のみ。」と論破している。この『華嚴経』に関する指摘は正しい。

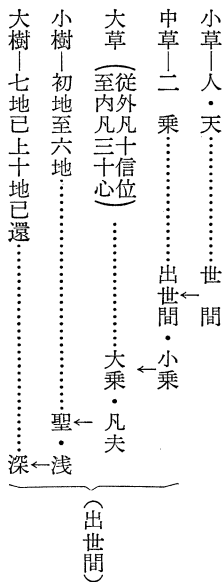
さて『法華文句』ではBとCの両説を掲げ、次に他の異説を挿入して後にAを自説として述べている。即ち「十住・十行・十廻向・十地」に「円道妙位一位」を加えた階位を掲げ「円道妙位是一位の中に、即ち四十一地の功德を具す。」というのである。しかるに『法華玄論』のA'では「十住・十行・十廻向・十地」の説を「有人言」としている。但し「円道妙位一位」には触れていない。

③ 信解品の積。『法華玄論』巻第七「信解品譬喩義」では

「一往化・随逐化・畢竟化」の所謂「三化」に関する諸説を掲げて後、「十地・金剛心等覺地・妙覺地」に至る登昇成仏を説いている。これは巻第四の「法華四種二智義」の説からして五十二位登昇成仏説とみることが出来る。

しかるに『法華文句』巻第六上「釈信解品」では、この「三化」に相当する説を「有人言」として掲げて後「私謂」の中でこれを批判し「節節妨げあれば、今皆用いず」と論断している。

④ 菓草喩品「三草二木」の積。『法華玄論』巻第七の積を图示すれば次の通りである。



『法華文句』巻第七上では右に類似の説を「有人」の説として批判して後、次のような自説を掲げている。

小草一人・天

中草一二乗

上草―六度(約三僧祇)

中国法華教学における歴位成仏(丸山)

小樹―通教(約七八九地)

大樹―別教(約三十心)

そして「増長」を説くが登昇の次第は明らかでない。

⑤ 分別功德品の積。『法華玄論』では五十位登昇後第十地満分成仏説を述べている。『法華文句』では「上の文の開示悟入仏之知見と今の本門の増道損生とは皆円位に約して解釈す。」といい「八世界発心者」を十信の位に入るものと解釈し、十住・十行・十廻向・十地と登昇して後「一生は等覺金剛心に入るなり。」と説いている。「開示悟入」の積では十信を除外しているが、分別功德品の積では十信から等覺に至る五十一位がみられ、これに仏位を加えるならば、この積は五十二位登昇成仏説とみることができよう。

智顛(灌頂)や吉蔵は、道生・法雲等の先師の説や天親の『法華論』を参照しこれに批判を加えながら自説を立てた。上述の『法華文句』と『法華玄論』をみるに、共通の素材を用いながら結論を異にしている。そして相互の影響関係は複雑である。これは現存の両本の成立にかかわる問題である。また『法華文句』或いは『法華玄論』それぞれの中にも登昇の次第に異説がみられ、問題を一層複雑にしているのである。

1 水野弘元「十地説の展開」(宮本正尊編『大乘仏教の成立史的研究』三省堂、昭和二十九年、二七六頁。山田龍城『大乘仏教

成立論序説』平樂寺書店、昭和三四年、二二二頁。平川彰『初期大乘仏教の研究』春秋社、昭和四四年、二八三頁。伊藤瑞毅「十地経諸本および十地思想に關する近時の研究成果、そして研究課題の所在について（一）」（『国訳一切経三藏集 第四輯』大東出版社、昭和五三年、一〇五頁）。

2 『妙法華』大正九・六上（方便品第十四偈 ケルン・南条本 K 32, 5; 荻原・土田本 W 30, 23; ナリナクシャダット本 Z 25, 19; ヴァイディヤ本 V 22, 29）ほか。

3 「不退諸菩薩」——『妙法華』大正九・六上（方便品第十七偈 K 32, 11; W 31, 11; N 26, 5; V 23, 11）ほか。「阿鞞跋致」——『妙法華』大正九・一五中（譬喻品第一〇六偈 K 93, 2; W 87, 21; N 65, 20; V 65, 6）。

4 『妙法華』大正九・四四上—中（分別功德品 K 328, 1f.; W 279, 18f.; N 215, 15f.; V 196, 13f.）。

5 「印度学仏教学研究」二九一二、昭和五六年三月、七八頁。大正九・五下一六上。

7 続蔵一—二—乙—二—三—四—三九九左下。なお、中国仏教思想研究会「道生撰妙法蓮花経疏対訳」（『三康文化研究所年報』第9号、昭和五二年、一六六頁）参照。この「対訳」には「卷上」（序品第一より信解品第四まで）の原文と訳注が掲載されている。8 水野弘元、前掲書二七六頁。山田龍城、前掲書二五二頁。平川彰、前掲書三三〇頁。9 大正九・七中。続蔵一—二—乙—二—三—四—四〇〇右下。

11 平川彰、前掲書三五七頁。なお『大智度論』卷第二十三、大正二五・二三五上参照。12 大正九・一六下。

13 続蔵一—二—乙—二—三—四—四〇四右。上。

14 大正九・二〇上—中。なお拙著『法華教学研究序説—吉蔵における受容と展開』平樂寺書店、昭和五三年、一三〇頁参照。

15 続蔵一—二—乙—二—三—四—四〇六右。上。16 大正九・四四上—中。17 続蔵一—二—乙—二—三—四—四一〇上—左下。

18 前掲、註4。荻原雲来『漢訳対照 梵和大辞典 増補改訂版』鈴木学術財団、昭和五四年、二九二頁。平川彰、前掲書三二二頁。『正法華経』大正九・一一五上—中（「一生補処」）。

19 大正三三・五九九上。20 大正三三・六〇三中—下。21 大正三三・六三五上。なお『法華文句』（大正三四・八一中）参照。

22 大正三三・六四〇上。なお『法華文句』（大正三四・八七中）参照。23 大正三三・六四七下。同六五一上—中。なお拙著、前掲書一四五頁参照。

24 『妙法華』大正九・二〇中。25 大正三三・六七二上。26 大正三四・四四下。

27 『文句』大正三四・五〇中。『玄論』大正三四・四〇三上。

28 前掲拙稿「印仏研」二九一二、八一頁。『文句』大正三四・七九中。

29 前掲拙著一四八頁。30 前掲拙稿「印仏研」二九一二、八二頁。

（昭和五十五年度総合研究（A）の研究成果の一部）

（信州大学教授）